



右隻



(参考) 左隻

14 唐土名勝図屏風 雲谷派

江戸時代中期(十七〜十八世紀)  
絹本墨画淡彩  
一〇八・三×三六七・八

八曲一雙のうち右隻

鎌倉時代から室町時代に渡来した中国の山水図、あるいは名所図が日本の絵画に与えた影響は非常に大きい。その中に杭州の名勝地で、二〇一一年に世界文化景観遺産にも登録された風光明媚な西湖がある。平安時代には白居易の詩によってわが国にその様子が伝わり、その後、禅僧や招請された中国僧による漢詩文や日記、隨筆によって伝播されたその風景イメージは、禅宗の隆盛に伴って憧憬の地として絵画化されることとなった。また、中国へ渡り、直接、中国の自然や風物に接した雪舟が、その経験から視覚的な造形空間による作品を描いたことで、以後、パノラマ的な構図の名所図が描かれるようになる。すなわち、詩文からのイメージによる絵画化から、实景に基づく図様へと転化したのである。

こうして形成されていった西湖図は、狩野派を中心とする粉本学習の中でさらに拡がりを見せ、寺院や大名屋敷の襖や装飾用の屏風に描かれた。西湖八景、西湖十景といった詩画題も生まれ、瀟湘八景と共に、日本の風景観、絵画制作に多大な影響を及ぼし、豊かにした。

本屏風は、片隻にその西湖、もう片隻に雪舟も立ち寄ったという名勝地、金山寺を中心とする景観が描かれる。西湖と金山寺を組み合わせることは、江戸時代の雲谷派によって始められ、江戸時代を通じて、雲谷派が得意とした画題の一つとされる。雲谷派は、等顔(一五四七〜一六一〇)を祖とし、雪舟の流れを汲んだ画派として、山口の萩を拠点として毛利家に仕えた画派であり、本図もその中で制作された江戸時代中頃のものと考えられる。雲谷派の描いてきた西湖図を踏襲しながら、視点をやや変える工夫なども見られ、丁寧な描写でまとめられている。墨画を基調としながら、画面の一つの主要なモチーフとなる水の表現には淡く色彩を施すことで、雄大感を表出している。また、建物や山などにはその名称を記した小さな題簽が付されている。

明治年間に個人から献上された作品である。



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

## 名所絵から風景画へ——情景との対話

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 76

編集 宮内庁三の丸尚蔵館  
制作 株式会社 東京美術  
翻訳 黒川廣子  
発行 宮内庁  
平成二十九年三月二十五日発行

© 2017, The Museum of the Imperial Collections, Sanjōmaru Shōzōkan